慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラツラフ著 自由競争の理論 : Ratzlaff, “The theory of free competition” Philadelphia, 1936.
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.3 (1937. 3) ,p.471(131)- 482(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19370301-0131
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370301-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラツラフ著「自由競爭の理論」

——Ratzlaff, "The theory of free competition" Phiiadelphia, 1936.——

氣賀健三

「英國人に取つては、競爭といふこと程、科學上の概念としても、果た或ひは吾々の社會生活の一特徴としても親しみ深いものはないといつてもよい。實に競爭といふ事實は吾々の經濟的活動の大部分を包括し、吾々の經濟理論の大部分は此概念の上に立てられて居る。然るにも拘らず、競爭的鬪爭の性質に關して全く正反對の意見が把られて居り且つ又經濟學者が科學的な意味に此言葉を定義する爲に注意深く試みて居らぬといふことを吾人は見るのである。

ハーバート・フォクスウェル」

といふ文句がラツラフの著書の卷頭を飾つて居る。彼の「自由競爭の理論」を讀むものは、之を讀み終つた後には、彼が此文句を卷頭に掲げたのも尤も至極だと感ずるに相違ない。ラツラフは正に文字通り此文の眞實性を摘出すると同時に、其摘出後の責任を果たすことに或程度まで成功した。といふのは、つまり彼は現在に至るまでの多數の英國經濟學者の自由競爭なる言葉の解釋が如何に多岐多端に亙るものであるか又今日の自由競爭批評家の多くが、如何に此言葉を誤解し、不當な評價を下して居るかを證明したのである。加ふるに豐富な引用や周到な考證は此書

の價値を高めて居る。

惟ふに、今日の經濟思想の一方の趨勢として、自由競爭の弊害が實に辛抱に堪へぬものであり、資本主義制度が今にも大變革を蒙り、社會主義的な經濟組織が間近に出現するであらうといふ樣な意見が、可成り汎く流布されて居る。然かも斯くの如き意見を抱懷する人々の或者は、その所謂る資本主義的社會に於ける支配的原則と考へられる所の營利的行動なり自由競爭の效果なりに就て、其眞實の意義を何等顧みることなく、寧ろ弊履の如く之を棄て去ることを好んで居る有樣である。斯樣な趨勢、斯樣な見解は、經濟學の研究の爲には餘り喜ばしいことではない。新しきを知るには古きを温ねることが必要であることを自覺せねばならぬ。而してラツラフの著書は、實に斯くの如き輕率なる傾向一般に對する一大警鐘たるの觀があるのである。彼が此著書の結論の最後の一節に述べて居る次の言葉は、其所以を正しく表すものと見てよからう。即ち曰く、

「競爭及び競爭秩序の批評家の提出せる今日統制計畫の中に、果して社會主義の徹底的な拒絶が包含されて居らぬか何うかといふ疑問は、當然起されてもよいであらう。彼等批評家は『經濟的競爭』の秩序に取つて結極何が根本的であるかを見て居らぬのであらうか。『經濟的競爭』の秩序は、分散化せる團體的形態の競爭が、集中化せる聯合的形式の競爭に漸次激しく移行するに連れて必要となつて來た所の再調整に伴ひ、益々廣範圍に亙つて政府の側の積極的行動を要求するものではなからうか」。（三〇二頁）

獨占と云へば直ちに競爭を排斥するものと考へ、統制と言へば直ぐ樣社會主義的な經濟と速斷する所の一部批評家に取つては、ラツラフの說く樣な斯くの如き結論は全く意想外の所說と感ずるであらう。

此書は其論旨から見て四つの部分に之を分つことが出來る。第一は先づ問題の敍述で第一章が之に相當し、第二は自由競爭又は經濟的競爭の概念の分析及び其說明で第二章が之に當る。此部分に於て、著者は自己の抱懷する經濟的競爭の正しい解釋を主張する。本書中最も興味ある部分である。第三部は主として英國經濟學者の指導的地位にあつた人又は現在其地位にある人々に就て、それ〴〵競爭の意義を批判的に敍述し、以て其本義を鮮明ならしめんとせる部分で、第三・四及び五章が之に充てられる。最後の部分即ち第六・七・八の三章は、英國の近代の經濟學者又は社會思想家に就いて、自由競爭を制限せんとする目論見が奈邊に在るかを指摘し、同時に經濟競爭を否定する彼等の所說の矛盾を曝露して居る。而して各章の終りに其內容の要約が記載され、又全卷の最後に全體の結論として、概要に相當するものが記されてある。次に大體之に從つてラツラフの要旨を紹介しよう。

先づ問題として提出されるものは、自由競爭（free competition）の意味である。從來此言葉が如何に漠然且つ曖昧に利用されたかは、之の代用語又は同義語として個人主義（individualism）とか自由放任（Laisser-faire）とかいふ言葉が使用されて來たのを見てもよく判る。斯樣な誤解、混用は、特に――マルクス派たると所謂る空想派たるとを問はず――社會主義思想家の中に見出されるのであつて、其爲に實に測り知れざる程莫大な人間のエネルギーの損失が在つたと原著者は云ふて居る。

さてラツラフは競爭に關する從來の解釋をば次の如き範疇に區別する。即ち競爭をば形式の問題と考へるものと結果の問題とするものとである。前者は相競爭する單位の數なり大さなりを意味し、後者は此等の單位の活動から生ずる所の滿足を意味する。歷史上此兩者を區別し、後者に經濟的競爭の眞意義を認めたものは殆ど無い。ラツラフはリーフマンを擧げて正當に兩者混同の誤を認識せるものと述べる。蓋し單位が大きくなるとか其數が減るなどといふことは必しも競爭の效果に影響するものでもなく、又競爭其物の本質を變へるとは限らぬから、形式上の競

爭即ち經濟的競爭と解するのは正しくないのである。

ラツラフは競爭に就て更に別の見地から區別を行ふ。即ち理論上の一つの要請として用ひられる場合、政策上の一つの戒律として說かれる場合、及び實際上の一つの制度として見られる場合即ち之である。此三つの場合をそれ〴〵區別せねばならぬ理由は、即ち或一つの意味に用ひて得たる結論をば、直ちに他の場合に用ひた時の結論と混同したりして競爭の意味が頗る曖昧になり、且つ又不當の判斷が屢〻之に對して下されるからである。

第一に理論上の要請として競爭の概念を利用することは、觀察の方法として、現實の抽象の爲に必要不可欠の手段であるから、別に之を否む理由はないが、唯〻之を戒律としての概念に利用することを避け、又せぬ樣に注意せねばならぬ。此注意を怠ることは、理論と政策とを混同する原因となるのである。又競爭を社會上の制度と考へることは、屢〻生物學上の進化の概念や、自然淘汰又は優勝劣敗等の譬喩を聯想し、之と同一視する傾があるのであつて、之又競爭の眞意義を傳ふる爲には大いに戒心せねばならぬことである。

ラツラフは更に又競爭をば、財貨の生產、交換、分配及び消費の經濟活動の四部面に分けて論じ、其一つより得たる結論を以て直ちに他を類推することの誤りを力說する。

所でラツラフは競爭の經濟學上の眞意義を如何に解するか。それは次の通りである。

「經濟的意味の競爭の定義は科學の一般的目的と一致せねばならぬ。此目的は欲望の滿足である。生產要素の移動可能性（mobility）は滿足增加の必要條件である。故に移動可能性は競爭の本質であるといふことが出來る。移動可能性の根本的必要條件は稀少性、功利主義（欲望の最大滿足）、處と行動とを異にするに連れて現在並に將來に於て報酬の上に生ずる差異に關する完全なる知識、生產要素の完全なる分割可能性であり、此等の必要條件の存在は政府の側に於ける建設的な政策に依存して居る。通例の信仰とは正反對に、經濟的意味の競爭は『放任』政策に依つて普及するものでなく寧ろ統制の計畫に依つて普及するものである」（五二頁）と。

ラツラフの此主張は其著書の根幹をなすもので、此章以後の部分は實に之が學說史的考證に充てられたものと言つてよい。其取上ぐる人物には、英國古典學派の諸名士例へばスミス、リカード、マカロック、ジョン・エス・ミル、ケアンズ等があり、更に近代に下つてはマーシャル、ピグーを俎上に載せ、又飜つて、正統派の系統に反對する所の英國フェビアン社會主義者やギルド社會主義者を捉へて之に批判のメスを下して居る。

彼は、歷史上の諸學說を吟味するに當つて研究者が常に戒心すべき事項として一、其著述の起れる時の經濟狀態、二、其の當時の政治上並に社會上の狀態、及び三、著者が關心して居つた當の問題の性質の三つを擧げる。此等の事情を綿密に考慮して初めて原著者の意味する所の眞意を了解することが出來ると說くのである。

彼は斯樣な見地の下にスミス、リカード、ミル其他の人々の「自由競爭」の意見を吟味批判する。而して彼等の何れもが、自由競爭をば直ちに政府の無干涉又は自由放任と同一視したり、又競爭の制限を排斥するものでないことを豐富な引用に依つて力說する。特にマーシャル研究の爲に設けられたる一章は頗る示唆に富むものである。彼は云ふ、マーシャルの經濟學には貫通する二つの原則があると。一つは繼續性（Continuity）の原則、今一つは代用（Substitution）の原則である。前者は總てを程度の相違から來たるものゝ如く觀察し、截然たる區別を施さぬ趣旨であつて、例へば經濟的正常的な行爲や動機と、倫理的又は愛他的な行爲や動機との間、或は又長期の問題と短期の問題等に就ても、明確な區別を設けやうとせぬのである。代用の原則は特にラツラフの主問題として居る所の競爭論に於て特に判つきりと現れて來るもので、之と前者の原則と兩々相俟つて經濟學上の推論の經となり緯となり、

彼の經濟學の一つの中心概念とも見らるべき、需要供給の均衡の概念の如きものが生み出されて來るのである。詳しく彼の所論を說く暇は無いから、彼自身の言葉で其要約を述べるならば、次の通りである。

「廣汎なる範圍に亙る經濟的研究、社會的關係の相互依存及び經濟的現象の統一がマーシャルの經濟哲學の顯著なる特質である。競爭に關する彼の推論は繼續性の原則に基礎を置く、否な之と一致して居る。平衡は即ち『根本的觀念』である。代用は之を實現する過程である。

現在の競爭の一般的性質に關するマーシャルの見解を理解する爲には、『經濟的自由』とか『企業の自由』とかいふ言辭の內包の方が『競爭』といふ言葉の內容よりは一層適當であることを指摘せねばならぬ。併しマーシャルは此等の言葉を混同して使用して居る。吾々の現代の經濟的自由の秩序は理想的なものではない、が併し現在の人間の諸性質を考へて見れば最も效果の多いものである。」

「社會主義的著作家が其主張に於て屢々誤つて居る點は『自由競爭』が協同的行動や政府の統制を妨げるといふことである。之はマーシャルの見解に反對である許りでなく、マーシャルは尙ほ、經濟的自由の制度が一般に兩者を廣い範圍に亙つて要求し、特に後者即ち政府の統制を要求するものであるといふことを說明して居る。」

「競爭を效果あらしむる所の代用の過程は、競爭又は代用が完全であることを想定しない。幾多の勢力の爲に抵抗されながらも、競爭は依然として支配的勢力である」と。（一六五頁）

斯くの如く、マーシャルに在つては、競爭の支配的勢力が依然として承認されて居るが、彼の後繼者と言はれるピグーに於ても、此根本思想には變りがないと思はれる。彼の代表的大著「厚生經濟學」は彼の所謂る經濟的福祉を如何なる場合に增加し得るかといふ條件を論じたものであるが、其中、自由競爭に關する議論に、就て見るならば、

——勿論競爭の問題は彼の所論に於て重要なる役割を演じて居る——自由競爭が彼の所謂る國民の經濟的福祉を完全に增大するとは考へて居らぬ樣である。人間の無智、移動の費用及び分割可能性の不完全の三つは競爭の善い效果を妨げる主要原因と看られる。又競爭が獨占的傾向に影響されて來るに從ひ、競爭の效果も又影響を蒙る。獨占が好影響を與へる場合もあり、其反對の場合もある。國民的福祉を最大ならしめんとする條件の此等の不完全性の故にピグーは國家の干涉、公團體の支配を認めて居る樣である。併しながら此等の干涉は、ピグーの所論を通觀するに、競爭的秩序に多大の變化を及ぼす如き規模のものではなく、寧ろ其必要なる干涉に就ても餘り效果を期待して居らぬものゝ如くである。

ラツラフは次に英國社會主義者の一群を前期と後期とに分けて批判する。前期に於てはフェビアン社會主義の代表者としてシドニー・ウェッブを擧げ、後期に於てはG・D・H・コール一派のギルド社會主義を取擧げる。

フェビアン社會主義がヘンリー・ジョージ、カール・マルクス及び英國傳來の自由主義的合理主義や民主々義の合成物であるといふラツラフの主張は其儘認めてよいであらう。

今ウェッブに就て競爭的秩序に關する議論を取つて見るならば、

「現在の競爭的個人主義は全ての範圍に亙つて、個人の正直なる給付の稱揚に役立つものでなくて寧ろ個人の利益の追求——即ち富の生產でなくして財の獲得への——の稱揚に役立つものである。」（二二一頁）

或は又

「今では經濟學者は、自由競爭と土地並に資本の私有の下に於て（さへ）、如何なる個人と雖も彼自身の勞働の全收穫を恐らく入手し得ないことを知つて居る。」（二二五頁）

と言ふて居る。

斯くの如き言葉は明かにマルクス主義的獨斷と思はれる見解を示して居るが、之はラツラフに言はせれば明白に偏見なのである。然かも他方に於て競爭の眞義を解せず、唯誤解を以て之を批評し、其の競爭の效果を全然破壞し去るが如き社會化を目指して居る。斯樣な傾向は、併しフェビアニズムの近年の綱領に於ては著しく改革せられ、一面に於て其計畫は人爲的、加工的となつて實施不可能を思はせるもの多大となると同時に、他面に於て自由競爭の效果を期待するが如き論調に轉換して來て居るとラツラフは說いて居る。

彼はギルド社會主義をば、フェビアニズムの後期の形態と考へる。此主義は前者の樣に、一切の物の公有並に公營の如き提案を爲さず、生產者の管理又は職能制經營を說く。所謂る「ギルド」は此職能制度の單位を爲すものと考へられる。此ギルド社會主義は旣に我國に於て種々批評の的となり諸々の欠點を指摘され來たつた所であるが、ラツラフも亦此主義に贊成しない。或ひはギルド同志の間で、或は消費者の利益に對する適應性に於て、或は事業の發展、變動に對する敏感性に於て種々欠くる所があり、推稱すべき政策とは考へられないのである。

ギルド社會主義者以外に、自由競爭を批判する一群の現代英國の批評家として產業の「合理化」を主張する人々がラツラフの俎上に載せられる、彼等の主張の根本は「國家は政策を支配せねばならぬ、但し其實行の爲に自ら手を下す事を避けねばならぬ」（二八七頁）といふに在る。此「合理化」の具體的內容と見られる所は何かといふに、其一つは失業解消案であり其二つは國民的資源の意識的開發及び投資の統制である（二八八頁）其案は專門的な公的當局者をして其任に當らせることに在るのであるが、詳細に今之を紹介する餘裕はないが、ラツラフは斯樣な提案に對して餘り期待を掛けて居らぬ樣である。

之を概觀するに、初期のフェビアン社會主義は、生產手段の公有を主張して來たのが、今日では明らかに變化し、今や社會の經濟生活の公的統制丈けが希望となつて仕舞つた。「フェビアン主義やギルド主義から離れ、現存議會に依る統制とか『社會的議會』に依る統制とかを希望することなく、特殊の分化せる公的當局の協力に依つて活動する統制委員會に依る管理を希望するに過ぎない。」（二八九頁）

ラツラフは此處に於て結論を下して曰く「此事は結局、少くとも差當つて、競爭に對する一攻擊手段として社會主義を見ることを放棄することに外ならぬ。同時にそれは產業の『合理化』の一手段として吾々の公益團體の行爲を承認することである」（二八九頁）と。

之を要するに、ラツラフの眞意は、今日の經濟問題として、自由競爭的效果を飽くまで維持し、且つ實現せんことを期待する所に在る。その爲には社會主義的なあらゆる計畫經濟の行爲をば、一國の經濟的福祉の爲に採らざる所と爲して居る樣である。

吾人は斯くの如き主張に對して何等異義を挿むものではないが、彼の說く自由競爭其自體の意味に就て二・三の曖昧な點を指摘したい。其一つは彼のいふ生產要素の「移動可能性」の意義である。財貨の移動可能性即ち自由競爭の效果と考へて居るが、之は少しく疑問である。吾人は寧ろマーシャルの言ふ「代用」（Substitution）こそ效果の上から見た自由競爭の眞義を指摘するものではないかと思ふ。ラツラフは其行論に於て移動可能性と代用性とを時に混同して居る樣な場合が見受けられる。それから又競爭の概念をば、多岐多端に分類して居ることは、反つて混亂を增す怖れがある樣に感ぜられることがある。例へば競爭をば四重の關係——即ち使用主相互間、被傭者相互間、使用主と被傭者間、生產者と消費者——と見るが如き、又消費上、生產上、分配上及び交換上の競爭として見る如き、

それである。吾人がラツラフの書を通讀して屢ゝ迷ふことは、彼が如何なる意味に自由競爭を用ひて居るかといふことである。此は、自由競爭の本旨を明にせんとした此書の目的から見て一つの重大な欠陷を爲すものである。最後に一つ惜しく思ふことは今日の社會に於て、形式上衰へたりと感ぜられる自由競爭の傾向に關して何も說明されて居らぬことである。尤も彼は次に獨占的競爭の理論を書く用意があるといふことを述べて居る所を見れば、吾人は之に期待を懸けるより外に致し方がないかも知れぬ。

此書に就いて、The Economic Journal の昨年十二月號にラーナーといふ人が批評を載せて居るが、之は又頗る惡意に充てるものである。此書は少しも自由競爭の意味を明瞭にして居らず、著者は都合の好い意味に之を使用して其論旨を進めて居ると難じ、又醜い事には著者が猶太人であるといつて輕蔑して居る。

ラーナーの論難の中で、筆者の興味を惹いたのは左の一節である。即ちラーナー曰く「此著の幾多の部分に於て、諸要素の移動可能性が競爭の『本質』であるとなす假定は、著者が資本家的社會以外に考へることの出來ないといふ其無能を示すか、或は又、各種生產要素が、其內的必然性から、最も利益のある所へ動いて行く利潤追求物であるとなす以外に考へることの出來ぬ無能さを示すものである。理想的の產額は、最大量の生產物の意味に於ける自由競爭は、完全に集合化されたる社會に於てすら目的とせられる。而して若し斯樣な社會に於て、生產要素が、丁度資本家的社會に於て迅速且つ正確に流れる樣に、其最高生產力を發揮する所へ何とかして置かれるならば、其場合には、恐らく何等の『移動可能性』なくして『結果の上から見た』自由競爭があることに爲るであらう。」と。

此批評はどういふものであらうか、ラツラフが資本制的社會を想定し、利潤追求の社會を念頭に置いて居る事は正に其通りであらう。が併し、ラーナーの後半の文章は之に對する批評として机上の空論たるそしりを免れ得ぬものではなからうか。生產要素の移動性が無くして、如何にして其最大生產力の發揮が可能であらうか。又一口にいふ生產力とは一體何を尺度にして測定せられるのであらうか。財產の私有と交換の自由と貨幣の使用とは今日の吾人の經濟生活から之を切離して考へ得られぬものではなからうか。然りとすれば、如何に生產的企業が集合化される樣とも、財貨の移動性や、代用性に考慮せずして『何んとかして最高生產力の發揮が出來る』とは、實際問題として吾人の想像し得ざる所である。